

アクティブ・ラーニングの基本となる国語科の指導

～小学校「話すこと・聞くこと」の指導を中心に～

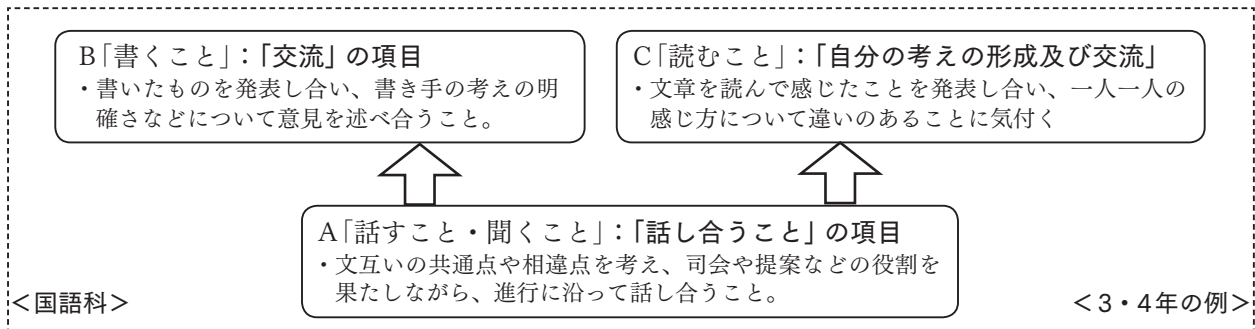
明星大学教育学部教育学科 特任教授 邑上裕子

I はじめに

新学習指導要領の告示前から「アクティブ・ラーニング」の文言は教育界に浸透している。授業改善の視点として示されているものの、活動主義に陥らないかとの懸念も見える。「アクティブ・ラーニング」としての基本の力を付けるためには、言葉の力を育成する国語科の指導によるところが多いというのが私の主張である。特に小学校教育における「話すこと・聞くこと」の指導を丁寧に、計画的に進めることが、授業改善の「アクティブ・ラーニング」を生かす近道であると考えている。

II 「アクティブ・ラーニング」につながる交流活動(共有)

(1) 現行の学習指導要領の国語科において「交流活動」は3領域にすべてに位置付く。



(2) 新学習指導要領の国語科においては、「共有」という資質・能力として、[思考力・判断力・表現力]の内容の3領域に示されている。

特にA「話すこと・聞くこと」には次の3点が重要である。新学習指導要領の小学校国語における解説では、以下のように記載されている。

- 表現、共有(話すこと)
適切に内容を伝えるために、音声表現を工夫したり、資料をしたりすることを示している。音声表現はそのままでは形に残らないものであるため、伝えたいことが明確になるような表現の工夫を重視している。
- 構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有(聞くこと)
話し手が伝えたいことと自分が聞く必要のあることの両面を意識しながら聞き、感想や考えを形成することを示している。
- 話合いの進め方の検討、考えの形成、共有(話し合うこと)
進行を意識して話し合い、互いの意見や考え等を関わらせながら、考えをまとめたり広げたりすることを示している。
話合いは、話すことと聞くことが交互に行われる言語活動であり、それぞれの児童が話し手でもあり聞き手でもある。話合いの過程では、「話すこと」と「聞くこと」に関する資質・能力が一体となって働くため、指導に当たっては、話すことに関する指導事項と聞くことに関する指導事項との関連を図ることが重要である。

以上のことから分かるように、交流活動(共有)につながる基本として、国語科における「話すこと・聞くこと」における継続的・計画的な指導が必要になってくるのである。

III 国語科における「話すこと・聞くこと」の指導の柱

「話すこと・聞くこと」の領域は、「話す」「聞く」「話し合う」という3つの言語能力に分けられているが、すべて「聞く力の育成」から出発すると考えられる。以下の理論のように、思考力と伝達機能に着目して指導に励みたい。

以下、柱になる理論である。

(1) 聞くことは考えることである。

「聴くとは受け身的ではなく能動的な行為である。相手の伝えたいことを正確に捉え、勇気づけ、引き出し、ときには批判し、自分の意見を再組織化しつつ聴くことが、能動的な聴き取りである。…」
～多田 孝志 日本学校教育学会会長・目白大学教授「月刊国語教育研究2012年7月号」より～

(2) 話し言葉は心を伝える機能をもつ。

「話し言葉は、消えるからこそ、聞き手は相手の目を、相手の顔を見ながら、相手の心を受け止めるという心遣いが大切になってくる。話し手も、自分の心を相手に伝えるというときに、表情や身振りなどに配慮すべきではないか。…」
～津田成一理論「未来に生きる話し手・聞き手を育てる『話し言葉』の学習」2011年、光村図書より～

(3) 対話の力を付けること。

「子供たちには『対話の基礎体力』をつけてあげてください。…異なる価値観と出くわしたときに、物怖じせず、卑屈にも尊大にもならず、粘り強く共有できる部分を見つけ出していくこと。…」
～平田オリザ氏「わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か」2012年、講談社現代新書より～

(4) 話し言葉は、話し手と聞き手の両者で成り立つ。

「…聞き手と話し手は常に交代している。…独話のときでも、実は聞き手が話し手と自己内対話をしているのである。話し言葉のやり取りは、話し手と聞き手の両者で成り立つのである。」
～津田成一理論「未来に生きる話し手・聞き手を育てる『話し言葉』の学習」2011年、光村図書より～

IV 「話すこと・聞くこと」の学習の実際

(1) 内容

指導の内容として、大きく分けて3通りが考えられる。

①「話すこと・聞くこと」の基本の学習

学習指導要領に示された指導事項を具現化する学習となる。聞く力、話す力、話し合いの力として示される。

②基礎的な技能学習

話したり聞いたり、話し合ったりするための基礎技能を培う学習である。新学習指導要領では「知識及び技能」の「言葉の特徴や使い方に関する事項」として新たに示された。具体的には、発声、発音、音量、言葉の抑揚、間の取り方、言葉遣いなど言葉の力として身に付けておくべきものである。

③言語感覚を培う学習

言葉のもつ特徴や、感覚、言語文化に通じる内容の学習である。音読や、朗読、暗唱、言葉遊び、語彙を豊かにする感覚を養う学習ともいえる。

(2) 学習の形態

以上の内容を、具体的な学習形態に合わせてみると、国語科を基点に他教科や全教育活動に広げると

大きく4通りが挙げられる。

①基本(習得)〔「話すこと・聞くこと」の単元〕

教科書単元を基に児童の実態に合わせ単元を計画する。

…例：聞き方、スピーチ、対話、討論。等

②練習(習得)(仮の場を設定し練習)

繰り返すことによって習得できる基礎的な内容を計画する。

…例：インタビューの練習、分からないことの尋ね方。等

③応用(活用)(他教科・他領域等を活用)

国語科の「話すこと・聞くこと」の領域で習得した力を他教科・他領域等で活用し、定着を図る。

…例：算数科「言葉で説明する」、社会科で「話し合う」。等

④日常の学習(全教育活動から、言語環境の整備)

全教育活動において、「話すこと・聞くこと」の育成を図る場を活用する。

…例：委員会の発表、式の言葉、司会の体験。等

V 指導の実践例

上記の考えを基に、東京都小学校教員(本学の卒業生を含む)と共に、計画し実践した事例を紹介する。

(1) クイズを生かした対話指導<1年生>

1 単元名「すごいぞ ○○小! ~1年○組の半年~」

2 単元の目標

- 確かめながら話を聞き、互いの考えを広げながら対話する。
- 答えにつながる質問の内容を考えるために話し合う。
- 自分ができるようになったことやすごいところを見つけた人を、理由や経験したことを加えながら話し、紹介を聞いて感想や質問を返す。

3 単元の評価規準と学習活動に即した具体的な評価規準

	ア 国語への関心・意欲・態度	イ 話す・聞く能力	ウ 言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	○学習に興味をもち、単元のめあてをつかんでいる。 ○進んでクイズに参加しようとしている。	○相手の考えを確かめながら話し合っている。 ○相手の話を受けて、目的に沿って自分の考えを話している。 ○自分ができるようになったことやすごいところを見つけた人を選んだ理由や紹介したいことを話している。	○答えを絞っていけるような質問に必要な語句を増やしている。
学習活動に即した具体的な評価規準	①クイズ大会をすることに興味をもっている。 ②入学してからを振り返り、自分ができるようになったこと書いている。 ③進んでスピーチカードを書いている。	①どんな人がいるか、聞いて予想し、考えを出す。 ②相手の話を受けて、聞き取った大事な言葉を確かめながら聞いている。 ③目的やルールに照らして、適したものを、理由を入れて話し合っている。	①答えを絞っていけるよい質問を理解している。 ②クイズの内容によって、質問を変えている。

4 単元構成

(1) 児童について(児童観)

話し合いの学習において、子どもたちは、好きなことや自分の宝物を友達に紹介した経験がある。そのときは2人組で行い、友達の発表を受けて感想または質問をするということも学習した。自分のことを話すことは練習をしたり、文を書いてから読んだりしたため自信をもって発表できた。しかし一方で、友達の発表を受けて感想を伝えたり、質問をしたりすることには苦慮する姿が見られた。このような実態から、興味をもって、話題に沿って話をつなぐ力を育むことが必要であると考えた。

(2) 話題について(学習材観)

本単元では、話題を「入学してから自分ができるようになったこと」「〇〇小で見つけたすごい人」とした。入学してから半年たち、自分自身と入学した小学校のことを振り返ることで、自分の成長や周りで支えてくれている人の存在に気付くことができるだろう。また、「入学してから」ということで、児童同士の話の土台も同じになる。学校生活は共通経験のため、自分の経験を生かしながらも、友達の成長に共感できるだろう。

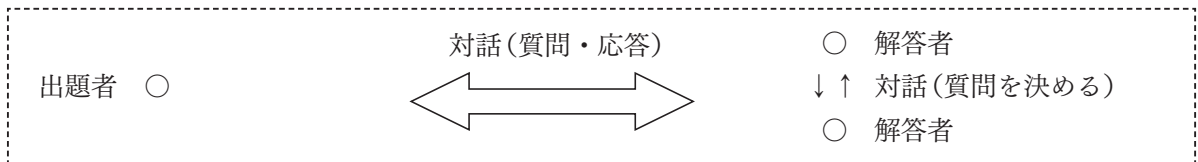
この時期の1年生は、いろいろな学習を通し、できるようになったことが増えてきている。また、学校生活にも慣れてきたため、校内の先生方や主事さん方にも目を向けられるようになってきている。しかし、それを周りに伝える機会がほとんどないため、今回この話題が有効と考えた。身近な話題を設定することで、児童が主体的に取り組むことを期待している。

(3) 単元について(単元観)

1年生はクイズが大好きである。また、自分のことを話すことも大好きなため、それらを生かした単元にしたい。今回は3人組で活動をする。1人が出題者で、2人が解答者という形をとる。「解答者を2人にし、話し合って質問を考えること」「質問は3回までとすること」という条件や制限を設けることで「3回の質問で答えを導くためにはどんな質問をしたら有効的なのか」ということを必然的に考える環境をつくり、2人での話し合いを活発化させたい。また、出題者は正解を発表した後に、自分ができるようになったこと具体例や気持ちや、〇〇小で見つけた人のすごいところなどをスピーチする。正解を言うだけでなく、スピーチをすることで、伝える力も高めたい。解答者はスピーチを受け、質問や感想を返す。スピーチを受けて返すことで「話をつなぐ」という対話する力を育てていきたい。

5 単元づくりの工夫

① 学習形態の工夫



上記のような形で学習を行う。ルールとしての重点ポイントに「解答者は3回しか質問できない」ことを挙げる。そうすることにより、解答者の2人は、どんな答えが考えられるか予想して質問しなければならなくなる。次の質問をどうしたらよいか考えるため、対話が必要になるだろう。

② 「はい/いいえ」で答えない質問の工夫

第2時で「よい質問」を確認する。その際、質問事項として「はい/いいえ」で答えられる質問だと「いいえ」のときに答えが絞っていけないことに気付かせる。

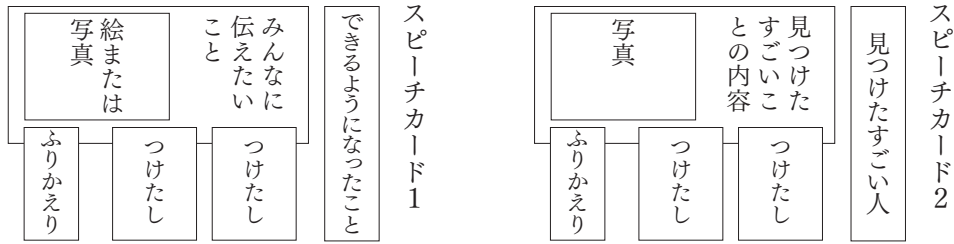
③ よい質問をするための工夫

試しのクイズを行う際、児童から出た「よい質問」は短冊にまとめておく。クイズを行う際、質問

にとまどっている児童がいた場合に掲示し、ヒントにする。

④ 自分の考えをもつための工夫

自分の伝えたいことをはっきりさせ、自信をもって発表できるようにするため、スピーチカードを作る。



6 単元の流れ（国語科6時間と生活科との連動）

(1) 導入

- ・「見つけたすごい人」と「できるようになったこと」をクイズ形式にして友達に紹介することを教える。
- ・「紹介したい人」を決め、取材する。(生活科)

(2) 展開(国語科6時間)

- ・教師出題のクイズで話合いの仕方を学ぶ。
- ・3人組で「見つけたすごいこと」のクイズをして、答えの紹介をスピーチする。(本時)

(3) 終末

- ・今までに学んだ話合いの方法を生かして「できるようになったこと」について、クイズとスピーチをする。
- ・「見つけたすごい人」「できるようになったこと」を掲示し互いに認め合う。(生活科)

7 本時の学習

(1) 本時のねらい

興味をもって話を聞き、相手の発言を受けて、話をつなげることができる。

(2) 本時の展開

学習活動	指導事項	◆評価★評価方法○指導上の留意点
○本時のめあてを確認する。		○めあてを全員で読み、見通しをもって学習できるようにする。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> そうだんめいじんになって、ともだちのすごいところクイズをあてよう。 </div>		
○クイズのルールと流れを確認する。		○ルールと流れは電子黒板に写しておくようにする。
<div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p>【やり方】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3人組で行う。 ・1人が出題者で2人が解答者になる。 <p>【出題者】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初に「わたしができるようになったことはなんでしょう」と言う。 ・質問されたことに答える。 ・正解を言ったあとに、自分ができるようになったことについてスピーチする。 <p>【解答者】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・質問する内容を2人で相談して決めて、質問する。 ・質問は3回できる。 ・「できるようになったことはなんですか。」は質問してはいけない。 ・「はい/いいえ」で答えられる質問はしない。 ・3回質問したら、相談して答えを言う。 ・正解とスピーチを聞いたら、質問か感想を伝える。 ・ヒントカードは2回の質問が終わったときのみ使用可能。 </div>		

<p>○クイズの進め方で大事なことを確認する。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>〈はなしかためいじん〉 ☆質問にあった答えをする。 ☆紹介する人についてくわしく話す。 〈そうだんめいじん〉 ☆1人で決めないで、2人で仲良く話し合う。 ☆どんな人がいそうか予想しながら考える。 ☆話をつなぐ。</p> </div>		<p>○クイズの進め方で大事なことは電子黒板に写し、クイズをやっているときも振り返られるようにする。</p> <p>○場にあった声の大きさと話すことを意識させる。</p>
<p>○「じぶんができるようになったことクイズ」を行う。</p> <p>○クイズの対象が「人」から「こと」に変わったことで、質問の言葉も変わることを確認する。</p> <p>○解答者は話し合っって質問を考える。</p>		<p>○よい質問は短冊に書き、掲示する。</p> <p>○パペットでよい対話例を実演し、モデル文を掲示する。</p> <p>○5W 1Hに1言加えたり、合体したりすると具体的な質問になることを指導する。</p>
<p>○クイズの1人目が終わったときに、正解した児童を中心にどんな質問をしたのか発表する。</p> <p>○対話のモデルを見て、どのように対話するとよいのか確認する。</p>	<p>・出題者からの質問に対する答えを受けて、二人で対話しながら次の質問を考える。</p> <p>・自分が考え付いたことを話題に沿って解答者の友達に話し、対話しながら質問を決めること。</p>	<p>○よい質問は短冊に書き、掲示する。</p> <p>○パペットでよい対話例を実演し、モデル文を掲示する。</p> <p>○5W 1Hに1言加えたり、合体したりすると具体的な質問になることを指導する。</p>
<p>○答え(スピーチ)に対して質問や感想を伝える。</p> <p>○振り返りをする。</p>	<p>・答え(スピーチ)を受けて、質問や感想を返し、お互いを認め合うこと。</p>	<p>○出題者は解答者の質問や感想を聞いて、大事なことはスピーチカードの「つけたし」部分に書き加えるよう伝える。</p> <p>◆目的やルールに照らして、適したものを、理由を入れて話し合っている。</p> <p>★授業観察・スピーチカードの振り返り</p>

8 < 授業参観後の講評 > (◎ = 成果 △ = 課題)

① 児童の姿から

◎ 「クイズに答える」という流れを意識し、質問を考えようとしていた。対話の形態を学んでいた。

◎ 「じゃあ、確かめよう」「相談しようよ」など、言葉への着目、つなぐ大切さを掴んでいる児童が見られた。

△ 早く進めるといふ気持ちが高まり過ぎた。クイズの楽しさと、対話の力を付けることの二者のバランスを考えたい。

② 指導の工夫から

◎ 生活科と国語科の連動による練られた単元の流れである。本時までのスモールステップが良い。

◎ 途中、児童を集め、「つなげるための質問」に着目させるよう指導したのは良かった。

△ 「つなぐ」機能を、話し合うことの充実として再確認する必要がある。

(2) 構成に着目したスピーチの指導<5年生>

1 単元名 「外国人観光客にやさしい街づくりを提案しよう」

2 単元の目標

- 考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、収集した情報を関係付けることができる。
- 目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成や資料の活用の仕方を工夫することができる。

3 単元の評価規準と学習活動に即した具体的な評価規準

	ア 国語への関心・意欲・態度	イ 話す・聞く能力	ウ 言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	○外国人観光客にやさしい街づくりに関心を持ち、工夫して伝えようとしている。	○収集した情報を関係付け、地域の方への提案や説明の内容を検討している。 ○自分たちが考えた街づくりの提案の利点や必要性を分かりやすく伝えるために、話の構成や資料の活用の仕方を工夫している。	○スピーチにはいろいろな構成があることについて理解している。
学習活動に即した具体的な評価規準	①やさしい街づくりについて提案するという事に関心をもっている。 ②地域を見つめ直し、問題に関する情報を集めようとしている。	①工夫して伝えるためにはどのような話すことの力が必要かを考えている。 ②集めた情報をもとにどのようなことが言えるのかを明確にしている。 ③提案内容が明確になるように話の構成を工夫している。 ④資料を提示しながら話す仕方を工夫している。	①スピーチにはいろいろな構成があることについて理解している。

4 単元構想

(1) 児童について(児童観)

①学習経験の実態

友達の話を受容的に聞くことができる児童が多い。しかし、質問したり、感想を述べたりするなどして、相手の考えをより深く理解しようという姿は少ない。そこで、ペアやグループで話したり聞いたりする機会を日常的に設け、受けて返す力を身に付けられるようにしている。一方、「話すこと」では、自分の考えが明確になるように筋道立てて話すことに課題が見られる。話の中心を明確にし、分かりやすく伝えるためには話す内容をどのように構成すればよいか、どのような根拠や事例を挙げればよいかについて考え、話せるようにしていきたい。

②話合いの実態

1学期に、併設されている幼稚園の児童に小学校のよいところを紹介する学習を行った。その中で、何をどのような方法で紹介すればよいかについてグループでの話合いを行った。園長先生から得た幼稚園児の様子や学校生活について1年生にインタビューした情報と自分たちが考える学校のよいところや紹介方法を関係付けて話し合うことを目指した。実際の話合いでは、関係付けることを意識して話し合う姿が見られた。しかし、関係付けて話し合う力を十分に身に付けられたとは言えず、今後も繰り返し指導していく必要を感じている。

(2) 話題について(学習材観)

2020年東京五輪開催に向けて、年々外国人観光客が増加している。子供たちも日常生活の中で、外国人観光客を見かける機会が多くなっているであろう。5年生で外国語活動の学習が始まりALTとの交流も経験してきていることから、外国人観光客に対する興味・関心は高まってきていると考える。しかし、新聞等でピクトグラム(案内図記号)や外国語表記の問題が報道されるように、言葉の壁を抱え

る外国人観光客にとって分かりやすい環境づくりという点では、未だ工夫・改善の余地があるのが現状である。実際に、観光庁が実施したアンケート調査によると、コミュニケーションがとれないことが外国人観光客にとっての最も大きなトラブルとなっている。そういったデータを示したり、ALTの経験談を聞いたりすることを通して、子供たちの中に外国人観光客にとってもやさしい街にしたいという思いが湧き上がってくるであろうと考える。

(3) 単元について(単元観)

本単元の学習は、地域の商店街の方から、子供たちの発想を生かして外国人観光客にも優しい街にするための工夫を提案してほしいという依頼を受けることから立ち上がる。そのため、本単元の活動の目的は、外国人観光客に優しい街という視点で自分たちの地域を見直し、具体的な工夫を提案することにあるといえる。

地域の方に納得してもらうためには、必要性についての根拠を示したり、具体的な場面に基づいた問題点やその解決方法を提案したりすることが求められる。それらは、音声言語だけで伝えるよりも、視覚的な資料(グラフ、写真、図など)を用いて伝えた方が効果的な場合が多い。そのため、子供たちは必要感をもって、何をどのような構成で話し、どのタイミングでどの資料を示すのが効果的かについて検討することが期待される。5年生段階では、これらの検討を一人で行うことは難しいため、グループで提案することとする。グループにおける主体的で対話的な学びを通して表現の工夫を吟味することは、言葉についての深い学びへとつながると考える。

作成した提案を地域の方に聞いていただく場を設定する。地域の方に提案を聞いていただき、反応をいただくことで、自分たちの考えたことが自分たちの街をさらによくすることに役立つという実感を得ることができると考える。

5 単元づくりの工夫

①地域の方の依頼から単元の学習をスタートする

子供たちが主体的に学習に取り組むように、地域の方から依頼を受け、それに対して自分たちが考えたことを提案するという活動を取り入れた。学習したことが実際の社会に役立つかもしれないという思いは、自分たちの考えを効果的に伝えたいという表現の工夫への意欲につながると考える。

②教師が与える資料と自分たちで収集する資料との二種類を活用する

視覚的な資料については、子供たちだけで効果的な資料を全て集めてくることは難しいと判断し、資料の一部は教師が収集したものを与え、子供たちはテーマに関連した身の回りの写真や自分たちでまとめた表やグラフを集めてくることにした。

6 指導と評価の工夫

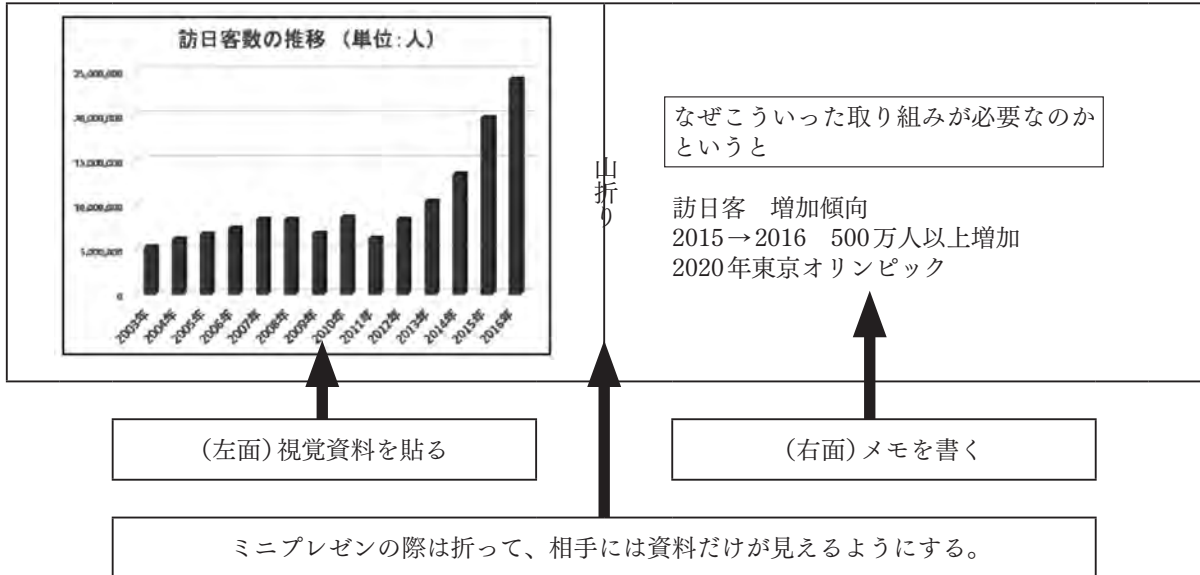
①教師による提案と比較しながら、自分たちの提案についての課題をつかむ

国語科の学習に主体的に取り組む上で、自分たちの学習の状況を捉え、具体的な課題をつかむことは重要である。そのためには、自分たちの現状と比較する対象があることが有効であると考え、第1時に教師による提案スピーチの動画を視聴する場面を設定した。すなわち、本単元における教師による提案スピーチは、学習のゴールイメージとなることに加えて、自分たちとの比較対象としての役割を担い、子供たちの「捉える力」を発揮させるための有効な手段となると考える。

②学習過程に繰り返し発表する活動(ミニプレゼン)を設定する

プレゼンテーションやスピーチの学習では、発表原稿やメモが完成してから初めて音声化して練習するという展開が多い。本単元では、構成の検討の段階、視覚資料の検討の段階でも、自分が提案しようとしていることを話して伝える活動(ミニプレゼン)を取り入れ、友だちからの評価を受けて加

除修正をする場面を各時間に設定する。そうすることで、自分たちが提案したいことが明確になってくるし、原稿を書かなくても話し言葉で発表の文言を考えていくことができると思った。ミニプレゼンは、①グループ内、②他グループの一人を聞き役に迎えてグループ内、③グループ間と、段階を追って聞き手を広げていく。その際、資料を提示しながら伝える力が高まるように、以下のカードを活用する。



7 単元の流れ (7 時間計画)

①単元の導入

地域から街づくりの工夫を提案してほしいとの依頼を受ける。

②課題設定・学習計画(第1時、2時)

○モデル動画を視聴し、課題を考える。 ○学習課題を設定する。

○学習計画を立てる。 ○学級共通の資料を読む。

③提案内容の検討・視覚資料の検討(第3時、4時)

○グループで話題を決める。 ○使いたい情報を検討する。 ○ミニプレゼンを行う。

○提案内容を考える。 ○視覚資料を用意する。 ○他のグループから一人招き、ミニプレゼンを行う。

④構成の検討(本時 第5時)

○モデル動画を視聴し、どのような構成になっているかを考える。

○話の構成を考える。

○他のグループから一人招き。ミニプレゼンを行う。

⑤発表メモの準備・発表の練習(第6時)

○発表メモを用意する。 ○グループ内でミニプレゼンを行う。 ○グループ間でミニプレゼンを行う。

⑥単元のまとめ(第7時)

○地域の方を招いて提案する。 ○学習を振り返る。

8 本時の学習

(1)本時のねらい

○提案したいことが明確になるように話の構成を考えることができる。

○話の構成にはいくつかの型があることを理解することができる。

(2) 本時の展開

学 習 活 動	指 導 事 項	◆評価 ★評価方法 ○指導上の留意点
1、学習のめあてを確認する。		○提案したいことを分かりやすく伝えるための工夫として構成、資料の提示、話し方があったことを押さえ、本時のめあてを確かめる。
提案したいことが明確になるように、話の構成を考えよう。		
2、モデル動画を2種類視聴し、それぞれがどのような構成になっているかを考える。 3、グループで提案の構成を考える。 4、他グループから一人招いて、考えた構成を用いてミニプレゼンを行う。 5、学習を振り返る。	・スピーチにはいろいろな構成があることを理解すること。 ・伝えたいことが明確になるように話の構成を考えること。	○尾括型、双括型の提案を比べることで、論の展開の仕方や効果の違いに気付くことができるようにする。 ○事例の提示の順序を工夫することも押さえる。 ◆話の構成の仕方には、いくつかの型があることを理解している。 ★観察 ○概ね満足できる児童への手だて それぞれのよさについて考えるように助言する。 ○概ね満足できる状況を目指す児童への手だて 掲示物を参考にするように促す。 ○どうしてその構成がよいと思うのか理由を明らかにし書き表すことで、筋道の通った展開であるかを考えられるようにする。 ○どのような言葉でつないでいけばよいかについても考えられるように促す。 ○構成を確かめながらミニプレゼンを行い、他グループの友達に聞いてもらうことで、話の内容が明確になっているかを確かめられるようにする。 ○聞き手は、「～に課題を感じたから、…を提案しようと思ったんだね」のように言葉で、話し手が提案したかったことを理解できたかどうか伝える。 ◆提案内容が明確になるように話の構成を工夫している。 ★観察、 構成メモ ○概ね満足できる児童への手だて 提案内容がより明確になるのはどのような構成であるかについて考えるように助言する。 ○概ね満足できる状況を目指す児童への手だて モデルと比べながら考えるように促す。 ○個別の振り返りカードを用いて、「分かりやすく伝えるために構成をどのようにしたのか」について振り返る。

9 <授業参観後の講評> (◎=成果 △=課題)

①児童の姿から

- ◎単元の流れを理解し、今までの取材活動に自信をもって授業に臨んでいた。
- ◎ミニプレゼンの効果は見られた。多くの児童が資料を提示しながら表現していた。
- △次時への具体的な課題を児童に確認させたい。

②指導の工夫から

- ◎地域につながる単元開発になっている。資料の作成など教師の支援が働き、児童が学習過程を主体的につかむことができていた。
- ◎思考力や、スピーチの機能を捉え、常に相手を意識させた指導になっていた。
- △尾括型、双括型という構成の型に気付かせるだけがスピーチの指導ではない。実際の話し言葉の中で、間の取り方、資料の示し方、相手への投げかけ方等様々な工夫に気付かせたい。

VI おわりに

人との関わりを通して学校教育は進められる。国語科の指導は「言葉による人との関わり方」を学ぶ教科でもある。それには、付けたい力の具体化、児童にとって必要感ある話題、実際に言葉の力が生きて働く単元構成、そして児童自身が自覚できる学習の見通しと振り返りの設定等、緻密な指導の工夫が求められる。児童が「話して良かった」「聞いて良かった」と自覚できるとき、言葉の力が発揮されたといえる。アクティブ・ラーニングは、その基本があって初めて機能する学習方法である言えよう。

参考文献

〔(現行)小学校学習指導要領 解説国語編〕文部科学省(平成20年8月)

〔(次期)小学校学習指導要領 解説国語編〕文部科学省(平成29年6月)

〔月刊国語教育研究2012年7月号〕多田孝志 巻頭言より(P.1)

〔未来に生きる話し手・聞き手を育てる『話し言葉』の学習〕2011年 津田成一、光村図書

〔わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か〕2012年 平田オリザ、講談社現代新書

〔東京都小学校国語教育研究会 研究紀要〕2017年より 等